

からである。監督や指導の爲め先生が附いてゐるといふのは未だ初歩の見に過ぎない。砂場の眞の價値は幼児が仲善く協力して遊んでゐる時、側らより之を熟視してゐる先生もいつしか我を忘れて、其零團氣の中に包攝せられてしまふ時に初めて現はれやう。斯くして再び我に歸れる先生の心の中には、今迄に無かつた、あるものが得られやう。

これを悦樂の境と云はうか、感激、生命と云はうか、或は「教育的惜心」と云はうか、「神性」と云はうか、言葉の末では云ひ表し得ないが、兎に角保育者に永遠の生命を與

## ある一日（園の音信中より）

土浦幼稚園 吉川コハル

へ、其の天職を楽しましむるに充分なる體驗である。小生は自分の小學時代に、土曜より日曜にかけて濱邊で砂遊をした時の愉快さを思ひ起して、もう一度あの境地を味ひたひと思ふ。それをあこがれ望みつゝ機會ある度に我國の砂場に行くのだが、今日の現状ではまだ前送遼遠の感がある。しかし決して失望はしない。先生方の御指導と御助力とを仰ぎつゝ、理想の園に向つて歩一歩と堅實な歩みを進めて行かうと思ふ。

（廿六日夜九時半）

八時半の鐘がカン／＼とひびく、ブランコからおすべりから、シーソーから、山茶花の下から、と急いで子達は組々の列に入る。かくしてお庭の一隅に整列し、姿勢を正して東の方に向つて 天皇陛下に御禮する。幼い子達にも 天皇陛下の尊さはわかるのか、此御禮は特別に丁寧にする「お早う」もすんで、青い空澄み渡る空気に一同が深

呼吸をして居ると、丁度此時、

唸りをたてゝ飛行船が雄大な姿を現して來た。

ワット云ふ聲、手を擧げる、萬歳を叫ぶ、保姆も子供になつて叫ぶ。飛行船は常になく低く、低く、次第に低く、「アレお船の中で何か振つて居る」と、いふものもある。うなりをたてゝ青空にと歌ひ出すもある。飛行船は低く緩

やかに園の上空を一週すると、急に高度を加へて次第に小く西に向つて消え去つた。此日は朝から飛行船のお見舞で子達は非常な元氣。

リンと笛の組は今日は先に唱歌、リンの組からいへば列の先頭から勢よくかけ足で昇降口に向ふ。

各自の組の室に入つてお仕度。……帽子をとり、お鼻を奇麗にし帯を下げる。ピアノの合圖に整列する。緑の列はお上手赤は少し後の方がと注意する。一直線に氣持よい程眞直ぐになる。再びピアノが響くと共に、手を下ろし足並靜に圓形の定めの席につく。保姆がピアノの手を止めて振りかへつた時は、幼兒はそれ／＼沈黙靜肅の態度になつて居る。二分！三分！五分！校庭の騒ぎも廊下の足音も邪魔にはならない。

自分の事は自分でする。人のいひつけは……。と靜に唱へて眼を開く。

立つて發音と發聲の練習をする。ソ、セ、ス、シ、サー。お口もしつかりと動くやうになつた。

後はお好きな唱歌、獨唱する兒もある。先生「きれいな

ガラス」といふ。保姆が「三度歌つて聞かせた事がある。教はらないのに歌へるでせうかといへば、歌へる／＼といふ。彈き出すと意外にも上手に歌ひ終つた。奇麗な可愛い唱歌で子供は大好きなのである。春入園の頃は短い歌一つも仲々覺えなかつたのが、知らぬ間にひとりで覺えて了つたので、子供の發達の早いのに驚く。時間が來たので一同外に出る。

お庭では先生々々とあちらからもこちらからも、毬をなげる。一人で受けてかへすのは仲々骨が折れる。でも先生の相手が子供は一等うれしいので、一生懸命高く遠へと投げる。けれど男兒の元氣のいゝのにはとても叶はない。遂う／＼苦しくなつて、先生は一つ時お休みといつて腰かける。女の兒は寄つて來て手をとる。後に立つ前による。おや。あなたのお耳の汚いこと、それ御覽なさい、こんなに黒く爪にかかつたでせうと取つて見せる。今夜お湯に入つた時手拭をぬらして自分でよく拭きとるのですよといふと優しくうなづく。先生私の爪きれいでせうと出して見せる兒もある。あなたはといへば手を後にかくす、餘つ程汚い

のですネ、と強いて引き出して見ると、長くて黒いものが一杯になつて居る。オヤ汚いといふと子供も笑ふ。

先生、榮ちゃんがくといふので顧みると、之は亦、砂の中に轉んだのか顔も手も砂まみれ、お鼻の二本棒が泣くのにつれて大きく下つてそれが亦お砂の二本棒、可笑しくもあり、氣の毒にもあり、手のつけやうがない。お目々に砂が入つてはとソーツとつれていつて洗はせる。

遊戯の時間となつた。——温度が急に下つて、少し寒いので行進を先にする。ピアノにつれて緩く、早く、強く、かろく、或は跳躍し、しつかりと運動する。あつくなつたあつくなつたといふ聲が聞こへる。定めの曲を弾くと一同が圓形になる、

何をしませうか……………、鯉さん鯉さんといふ、板の間が冷いから鯉さん寒いでせう。おじぎおじぎと亦いふ、おじぎも座布団が出来てからにしませう。では今日は先生のすきなもの、いゝでせうといつて律動の水兵と飛行船を弾く。終つた時は如何にも面白かつたといふ様に、ニコニコ。後はお庭の遊びに亦は手技にと自由行動をとる。

手技室、——今日は繪と貼紙である。

備へつけの箱から自分のクレオンを取り、畫紙を取り、空席を探して腰かける。今日は飛行船が仲々多い。茂さんのはあまり大きくて尾の方が紙から出て居る。いつも大膽に力強く畫く兒である。富夫さんのは飛行船から四方八方に玉のやうなものが突き出して居る。先生船だつて飾るでせう。飛行船を飾つたのだといふ。子供の想像は滿艦飾から飛行船の滿船飾と走つたのであらう。クレオンを仕末し、繪をカバンに入れて出で行くもあり、先生これお帳面に貼つてと渡し行くもある。

貼紙は大抵自由貼方迄進んで居る。子供達は面白くてならない。「何色をあげませう?」「先生、緑」では四つあげますからそれ丈お好きにお貼りなさい、後から亦あげますと次にうつる。

私は先生紫のまる。まるを六つ下さい、こゝにかう並べて貼るのと指さす。色の取り合せも仲々巧である。美代子ちゃんの前に行くと同色の四角が變な所に貼つてある。一寸注意してなほさせたいのを我慢して見て居ると、先生禰

色を澤山といつて並べて並べて立派な形が出来た。美代ちゃんには豫定があつたのである。餘計な事して子供の獨創を破壊す所であつた。あゝよかつたと保母は思つた。

十二時近く太鼓の組のお歸り時間が来た。太鼓がなる、太鼓の組の子供は貼紙帳を片付けて出て行く、残つた子供もボツ／＼お仕舞する。

一同が食前のお手洗ひをし、お辨當を喰べて後は一つ時お庭で遊ぶ。午後の貼紙が始つて午前に入れなかつた子供が待ち兼ねて入る。午後の手技も終つてお片付け當番は鐘

## 断 片

ぼか／＼と注意力のない無邪氣な、いたづらつ子のKちゃんをとりまいて、尋常科の子等が遊んでゐた。「Kちゃんには母さんがないな」こんな言葉をふと私は耳にとめて日頃のKちゃんに何となく思ひあたるふしがあつた。そんな子等の群から靜かに連れ出して、私はしばらくKちゃんを遊んだ。そしてあとでこんなことを云ひあつた。

の組、手別けして腰掛を机上にのせる。草履のぬぎ放し、忘れた帽子、クレオンの缺けまでも拾ひ集める。貼紙帳の積み重ねたるを糊猪口を保母室に運ぶ。お庭の遊戯具もそれ／＼取り纏めて當番の一同は受持保母のもとに集つて、

さよなら。御苦勞様。

威勢よくかけ出す男兒、優しくつれ立ちて歸る女の兒。

\* \* \* \* \*

一同を送つて後の保母室は、それ／＼に其日の子達の可愛い現はれを語り合ふのが例ならぬ例となつて居る。

## 河 野 ヲ ノ

「Kちゃんのお母さんはいないの？」

「うん」

「亡くなつたの？」

「うん、しんだ。今頃のくらしい時に」

「今頃のくらしい時に？ さう」

「うん、それに赤ちゃんもしんだ。」